

ルド調査（文筆家 鈴木涼美）の視点からの報告があった。各報告の要旨は https://jsssociology.org/meeting_archives/2019030892_1/ で閲覧できる。（釜野さおり 記）

G20岡山保健大臣会合開催記念国際シンポジウム「持続可能な高齢化社会・経済のためのライフ・サイクル・アプローチ」

10月18日、G20岡山保健大臣会合開催記念事業として国際シンポジウム「持続可能な高齢化社会・経済のためのライフ・サイクル・アプローチ」が岡山大学創立五十周年記念館にて開催された。G20保健大臣会合参加国からの有識者、研究者、学生など約220人が参加した。

「一人ひとりが若いうちから心身ともに健康な生活を送ることで健康寿命の延伸に繋げる」という考え方であるライフ・サイクル・アプローチに関する日本の事例を紹介し、健康でアクティブな高齢者が増えることによる経済への正の影響についてG20参加国の事例をもとに報告が行われた。筆者はTheory for Life-Cycle Approach and its Examples from Japanと題するセッションで、“Changes in family/gender policy in Japan and fertility rate”というタイトルで報告を行い、近年における日本の家族・労働政策と出生力との関連について解説した。また、各事例報告の後には、パネルディスカッションが行われ、アジア6カ国における高齢化社会への取り組みが紹介された。大会のプログラムは以下のURLから閲覧することができる。

https://www.okayama-u.ac.jp/upload_files/event/G20SideEventProgram_Final.pdf

本イベントは、国連人口基金（UNFPA）アジア太平洋地域事務所、外務省、世界保健機関（WHO）、ASEM Global Ageing Center、European Observatory on Health Systems and Policies、日本老年学的評価研究機構（JAGES）との共催で行われた。本シンポジウムでの報告にあたり、UNFPAアジア太平洋地域事務所・人口高齢化と持続可能な開発に関する地域アドバイザー 森臨太郎氏にお世話になった。この場を借りて感謝申し上げたい。（福田節也 記）

国際人口学会学術パネル：東アジアと南欧における家族行動「東アジアと南欧における家族変動についてのワークショップ」

10月25-26日、「東アジアと南欧における家族変動についてのワークショップ（Workshop on Family Change in East Asia and Southern Europe）」がアメリカ・ケンブリッジのハーバード人口・開発研究センターにおいて開催された。同ワークショップは、国際人口学会学術パネル「東アジアと南欧における家族行動（Family Behaviour in East Asia and Southern Europe）」（代表：James M. Raymo プリンストン大学社会学部教授）における活動の一環であり、ハーバード大学ライシャワー日本研究所所長のMary C. Brinton教授らのホストにより開催された。東アジアと南欧諸国は「強い家族（strong family ties）」と低出生力という一見共通する特徴をもち、それぞれの地域において低出生のメカニズムに関する独自の分析がなされてきた。しかし、両地域における少子化現象には、どのような共通点と相違点があるのかは必ずしも明らかではない。本パネルでは、国際比較研究の枠組みから、この課題に取り組み、少子化問題の理解と解決に向けた糸口を探ることを目的としている。今回のワークショップは、同パネルの運営委員らによる方針会議を兼ねたものであり、イタリア、スペイン、中国、日本そしてアメリカから19名の研究者が集まり、これにハーバード大学の大学院生ならびにポスドク研究者数名が参加した。ワークショップでは、まず各国における状況を

共有するため、日本、韓国、中国、イタリア、スペインの研究者が、それぞれの国について、最近の人口トレンド、ジェンダー、家族紐帯、ライフコースの不確実性、そして政策について報告を行い、議論した。筆者はRaymo教授、Brinton教授と共に日本についての報告を行った。これらの議論を受けて、今後、同パネルでは、①ジェンダー、②ライフコースにおける不確実性と格差、③家族紐帯、④文化、⑤家族・結婚・出生のもつ意味、⑥交際、性交経験、パートナーシップなどの親密性の6つのテーマについて比較研究を行うことが確認された。また、これらのテーマのもとに研究を進め、今年5月にイタリア・ミラノ、10月に中国・北京で同パネルによる国際ワークショップを開催することとなった。同パネルの活動については、以下のURLを参照されたい。

<https://iussp.org/en/panel/family-behaviour-east-asia-and-southern-europe>

(福田節也 記)

ICPD25 ナイロビ・サミット

カイロで1994年に開催された国際人口開発会議（ICPD）が開催されてから25周年となることを記念して、2019年11月12日から14日の期間、ケニアの首都ナイロビで、ナイロビ・サミットが開催された。ICPDはその10年後、20年後の2004年、2014年とも、同様の大きな会議は開催されなかったため、今回はそれに代わるような会議であるともいえる。ただ、国連が主催する政府間会合、というわけではなく、ケニア政府、デンマーク政府及び国連人口基金（UNFPA）の共催、という形をとり、政府のみならず、多くのNGOや関心のある個人の参加があった。135にわたるセッションが開催され、人口と開発の中でも特に、ジェンダー、女性、少女、リプロダクティブヘルスをテーマとしたものが多数を占めたが、各国政府代表のスピーチも粛々と行われ、人口ボーナスや人口高齢化に関わるセッションもあり、筆者はそれぞれにパネリストとして参加した。

開会式には、共催者であるカネム UNFPA 事務局長、メアリー・デンマーク皇太子妃殿下、ケニヤッタ・ケニア大統領の開会挨拶の後、アミーナ国連副事務総長やムセベニ・ウガンダ大統領、モハメド・ソマリア大統領など隣国の元首も歓迎の挨拶をした。9,500人とも言われた参加者が全員入るくらいの特設会場は、閉会式にも参加者で埋め尽くされ、開会式と同じ人数が閉会式に参加するような会議は珍しい、とケニヤッタ大統領が閉会の挨拶で称賛すると会場から笑いが起こった。

人口と開発に関しては、中絶や包括的な性教育、LGBTなど多くの議論点があるが、今回のサミットではさすがにLGBTに関するセッションは見受けられなかったが、安全な中絶や包括的性教育に関するセッションがNGO主体に複数開催され、多くの充実した報告があった。一方で会場の外で中絶反対団体がビラを配るなど、波風が皆無であったわけではない。不妊に関するセッションもあり、体外受精に対する中・低所得国における高まるニーズとアクセスの不平等、インドなどにおける代理母問題などが議論されたのも興味深かった。

会議の内容は <http://www.naibosummiticpd.org/> や <https://tokyo.unfpa.org/ja/icpd> に掲載されている。

(林 玲子 記)

2019年人文地理学会大会

2019年人文地理学会大会は、2019年11月16日（土）～18日（月）に関西大学千里山キャンパス（大阪府吹田市）において開催された。16日（土）に特別研究発表、17日（日）に一般研究発表（口頭発表）